
秋色

椎堂 真砂

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

秋色

【Nコード】

N8607D

【作者名】

椎堂 真砂

【あらすじ】

白前均時と別れてから数日、何の変わりもなく過ごしていた榊辻帥嗣。帰宅途中、彼の友人・霊山弥彦から聞いたとある『噂』はあまりに現実離れしていて、白々しくて、感情希薄な帥嗣を動転させるには十分だった。

無知と愛 01 (前書き)

この小説は西宮東先生の『風の中でそっとつぶやく。』を椎堂真砂風にアレンジした作品となっています。詳しくはお手数ですが、後書きをご覧ください。

秋色

君がなくては、愛することはできない。
君がなくては、死ぬことはできない。

ナキツジヒキツグ
柳辻帥嗣はいつものように、級友であるリョウウセンヤヒコ靈山弥彦と帰途に付いて
いた。

帥嗣が高校に入って早半年が経ち、季節は秋、十月になっていた。
ちょうどその日は帥嗣の通う公立高校では四日間続いていたテストの最終日で、勉強を得意としていない二人の顔には色濃い疲労が見てとれる。

前年までならばテスト最終日は午前中にテスト全過程が終了し、そのまま放課であった。しかしながら、今年からは授業時間数確保のため、テストが終了してもそのまま授業が行なわれるようになったのだ。

全学年合わせて計四百人のおおよそ九割五分がやる気がなく、憂鬱に思っている。帥嗣の隣を補修の事を思いながら、肩を落として歩いている弥彦も、その一人であった。

だが、帥嗣は違う。全校生徒の中の残り五分、二十人程度しかない生徒に帥嗣は含まれていた。

帥嗣は部活もやっていなければ、塾にもいっていない。バイトもしないし、遊びもしない。クラスメートと一緒に騒いだりもしない。今時珍しい、堅物な人間だった。

その為、彼は特にすることがなく、時間が空いているのだ。帥嗣

にとって、授業は丁度よい暇潰しなのである。

その割に勉強が得意でないのは、単純に要領が悪いのだ。弥彦のように、勉強を苦としているわけではない。当然、テストも帥嗣にとって、顔に疲労を浮かばせるほど、大変ではなかった。

彼が疲れを見せているのは、テストとは全く関係のない問題が起因しているのだ。

彼が先日起こしてしまった、とある問題の所為で職員室から呼び出しをうけ、担任から執拗に経緯を説明させられたのだ。その後帥嗣は罰として、グラウンドの隅で草むしりをさせられ、先刻、ようやく解放された。

基礎体力があまりない帥嗣にとって、固い土に根を張った雑草を、腰を屈めて引き抜き続けるのはかなりと重労働だ。

担任に説明した問題はといえば、未だに解決しておらず、帥嗣は今日、精神的にも肉体的にも疲弊しきっていた。

帥嗣はふと、重たく下がった頭を上げ、天を仰いだ。

空は西の空から東の空へ、紅色から漆黒に綺麗なグラデーションを描いていた。草むしりで遅くなったとはいえ、時刻はまだ五時半、日が沈むには時間として早すぎる。そんな風景に、帥嗣は秋を感じた。

グラデーションは空だけでなく、帥嗣達が歩いている商店街も同じである。彼等の進行方向は目を背けたくなるほどに赤々しく、振り返り見た後ろは吸い込まれそうに黒々しい。

帥嗣が風景に気をとられていると、前から人が来た。彼は慌てて軽く横に飛び、何とかかわす。避けた先にはまた人が居て、今度は反応することが出来ず、帥嗣は軽く肩をぶつけてしまった。

時間帯が夕食前だけあって、人通りが多い。近くに大型のスーパーマーケットがないので、近隣の住民は皆、ここに食材を求めてやってくるのだ。

帥嗣達が何故わざわざ、そんな混雑した商店街を選び、縫うようにして歩いているかといえば、単純に道がないからだ。俺らの通う

高校からこの町の大半が居住する住宅地行こうと思うと、どうしてもこの商店街を通過しなければならない。

無理にでも商店街を通らないように帰ろうと思うと、大きく迂回することになる。時間にして二十分の差。

普段ならば、この時間に通らず、人が少ない一時間前に下校している二人にとって、この混雑具合は予想外と言っている。

「それじゃ、また明日な」

「ああ、うん、また」

商店街をやつとの思いで抜けてすぐ、帥嗣は弥彦と別れた。

特に何か話していたわけでもないのに、帥嗣は急に静かになった気分が駆られる。商店街を抜けたということもあるだろうが、やはり一人になった孤独感が原因だろう。

そんなことを考えても仕方ない、と帥嗣は少しの間止めていた足を再び動かし出した。

歩きながら両脇の家を確認すると、もう窓から明かりが漏れている。帥嗣は再び、空を見上げる。空は鮮やかなグラデーションを描くことなく、真っ黒に塗り潰され、星が瞬き始めていた。どうやら帥嗣は商店街を抜けるのに、相当時間を費やしてしまったらしい。

彼はこれ以上遅くなつて、昴さんを待たせてはいけないと、歩幅を広め、歩を速くした。

その上最近、急に寒くなつてきている。帥嗣は早く家に帰って温まりたかった。

手袋さえつけていない帥嗣の両手は真っ赤に染まり、感覚まで麻痺してきている。彼は軽く肩を揺らし、持っている鞆を肩に深くかけなおした。

そうして鞆を安定させてから、帥嗣は制服に付属しているポケットに手をいれる。帥嗣は布と手が擦れて少しは痛みを覚えたが、家までの辛抱だと我慢した。

それで手は何とか暖をとれたが、彼にとってより大きな問題は耳をどうするかだ。手袋さえ持っていない彼が、イヤーマップルなど

持っているはずがない。

帥嗣はほんの少し迷ってから、小走りで家まで変えることにした。いくら基礎体力がないとは言っても、さすがに目と鼻の先にある家までは持つと判断したのだ。

帥嗣の家は彼から十メートルほど先にある、コンクリートで出来たタイトなカーブを曲がればそこから玄関が見える位置。直線距離にして三十メートルもない。

間もなく角を曲がり、玄関が見える。

そこでふと、脇にある電柱に目が奪われた。帥嗣は電柱マニアでもなければ、電柱オタクでもない。ただ、そこにあつた張り紙が気になったのだ。

張り紙には文字の羅列と小さくデフォルメされた人間の絵。一番上にある大フォントの『アルバイト募集』の文字が、帥嗣の目についたのだ。

張り紙の内容はありきたりで、書いてある通りアルバイトの募集だった。そのバイトは近所のコンビニの店員業務で、時給は高くはないが悪くはない。彼にとって何かと好条件だ。

この前、弥彦と一緒に県下有数の巨大なショッピングモールに出かけて、必要雑貨を買い揃えた帥嗣は金欠だった。

渡りに船であり、これを機にバイトを始めてみようとして、帥嗣は思い詳しく内容を読み込んだ。そうすると一番下に『年齢十八歳以上から』という但し書きを発見した。

帥嗣は軽くやるせない気分になり、ため息を吐く。そして彼は珍しく、八つ当たりのように電柱を蹴り、張り紙を剥がして丸めて捨てた。

帥嗣の手から投げ放たれた紙屑は緩い弧を描き、そして道路の反対側にある町内掲示板にあたる。そしてそのまま勢いをなくし、地面に落下した。

秋色

今度はやるせなさを身体中に感じながら、ため息をもらす。帥嗣は振り返り、自分が投げ捨てた紙屑を拾う。基本的に善人で

ある彼にとって、それは当然とも言える行動だった。

帥嗣はゴミを拾ったついでに、そこにある掲示物も読んでみた。

『バサーのお知らせ』

『ゴミ収集日の変更』

『みんなで止めよう温暖化!』

ありきたりで、手作り感あふれる張り紙。そんな中、帥嗣の目を一際引いた一枚があった。

『猫探しています』

張り紙には、そう書いてあった。

その張り紙は、決して奇抜なわけではなかった。猫なのに犬の写真が張ったりしていれば、目につくだろうが、そうではない。

猫の写真も至って普通。特徴をまとめると、血統書付きの白毛の雌、名前はミイ、だそうだ。郡を抜いて製作資金がかかっていな張り紙ではあったが。

目についたのは、また別のところ。

その張り紙の角には、後から付け加えたように縦書きの文章が付け加えられていた。

『死にたい』

ただ冷淡に、綺麗な字で書いてあるその字。少なくとも帥嗣にとっては、見ていてあまり気分のいいものじゃない。

あまりに簡素で、それでいて重い。

石でも嚙下したかのような気分の悪さに、帥嗣は駆られた。

見てしまった罪悪感と、どうしようもないという無力感が帥嗣を包む。

ただの悪戯かもしれない。死にたいほどの重たい悩みを、こんなところに書くはずがない。

でももし、と帥嗣は思う。

ふと帥嗣は、何かその馬鹿げたその言葉に、遊び半分につき合っ
てやろうと思ってしまった。

わざわざ鞆の中から適当なボールペンを一本だけ取り出し、軽く

ノックする。カチツと良く通る単調な音が響いて、ペン先が顔を出す。

堅物である帥嗣にとって、掲示板に張つてある張り紙に、消えにくい文字を書くなんて些か気も引けた。が、見つければ一生懸命消せば良いだけだと、軽い気持ちのまま帥嗣は文字を付け加えることにした。

黒ペンの先を掲示板の裏につけた瞬間、板が荒い所為で思った以上に抵抗が強い事を帥嗣は思い知る。字が綺麗な部類に入る帥嗣だが、あまり見映えのよい字が書けなかった。

『死ぬなよ』

それに加えて、稚拙な文。帥嗣は我ながら、恥ずかしく思う。内心、苦笑も。

それに、書き足した位置が悪かった。短くつづられた二つの言葉は無秩序になつている。子供の会話と変わらない。

実際のところ、相手が本物の子供かもしれない、互いの顔も知らぬ会話なのだが。

「冷え込んできたな……」

脇を抜けていく木枯らしに、帥嗣は身を縮こまらせてぼやく。

それを境に帥嗣はその落書きのことを頭から排斥し、小走りにすぐ近くに見えている家の敷地中に踏み込んだ。

金属製のノブが氷のように冷たく、手に刺さるようだった。荒い掲示板の感触を一切忘れさせてくれるほどに。

帥嗣は冷たさに堪え、ノブを回して家に入った。

無知と愛 01 (後書き)

前書きにも書きました通り、この作品は西宮東先生の、『小説家になろう』内では最長の部類に入る短編・『風の中でそつとつぶやく。』の椎堂真砂アレンジとなっております。

アレンジとは言っても名前を全員跡形もなくかえ、一人称も三人称に変えてしまいました。あと内容と展開も少々。

最初は原作の文章に加筆修正をちよつと加えるぐらいの軽い気持ちでしたが、やっている内に殆んど別作になるのではないかと私も思うほど変えてしまいました。

一応了解ももらってますが、やりたい放題やらせてもらってすいません、西宮先生。

ですが一応、原作を書き換えている形で執筆しているので、もとの文章もいくつか残っています。

もし、西宮先生のファンの方が読んだときのために、ここまで文章を変えてしまったことを謝っておきます。

すいません。

本当にごめんなさい。

さて、この『風の中でそつとつぶやく。』のアレンジをしたのは訳があります。

この度、自己紹介文には書いたのですが、西宮東先生の『榎風といつしよ!』の続編を手掛けることになりました。

その為のワンクッションとして、西宮東先生の文章を書くところなる、という試験として書かせてもらいます。

その為、参考意見などを寄せていただけるとありがたいです。

ちなみに『秋色』は一日一話ペースで投稿し、終了してから意見を参考にしながら『榎風といつしよ!』の続編を書く予定。

どうも長々と失礼しました。

最後まで報告ばかりの後書きを読んでくださりありがとうございます。

秋色

ます。

最後の最後、付け足しみたいで西宮先生に申し訳ありませんが、原作である『風の中でそつとつづやく。』、『榎風といっしょ』のほつもよろしく願います。

家に入ると雑多な音がテレビから流れているのが聞こえた。どうやら、コメディ番組のようだ。

お笑いにさほど興味のない帥嗣はそれ以上考えることなく、リビングまで入る。リビングには誰もおらず、ただ虚しく笑い声がテレビから漏れているだけだった。

誰もいないのにテレビがついていることを不思議に思い、帥嗣は辺りに人気がないか耳を済ましてみる。すると、微かながらする水音を帥嗣は聞き取った。

どうやら同居人である昴が、テレビをつけたまま入浴を始めてしまったらしい。昴はそういうところに関して、ずぼらな人間だったので消し忘れたのだろう、と帥嗣は納得した。

誰も見ていないならと思い、大して考えもしないままチャンネルをテーブルから拾い上げた。新聞の番組表をいちいち見るのも面倒なのでとりあえず『1』のボタンを押してみる。

七時という時間帯故に、大衆向けのバラエティーだ。興味がないので、内容も大して見ないまま次のチャンネルへと変える。

またこれもバラエティーだ。先程と似たような面子が、道化に徹して笑いをとっている。

どれもこれも似たようなものばかり放映して儲けはあるのだろうかという、無駄な疑問を帥嗣は抱きつつ、チャンネルを変える。

再びバラエティーかと思ったが、予想をはずしてニュース。中年男性のキャスターと若い女性のアナウンサーとが、今日この頃の出来事を意見を混ぜながら、無感情に、それでいて真剣さを漂わせながら読み上げている。

帥嗣はそこで、チャンネルを変えるのを止めた。どうせやっているのはバラエティー番組ばかりだと諦めたのだ。

普段からニュースどころか、テレビをあまり見ない帥嗣でも、二

ニュースならば意味をもって見る事ができた。

内容はどうやら昨今問題になっている政治問題について。特集が組まれているようだ。だが、中途半端な所から見始めた為、正直なところ話がわからない。

ずっとこの特集ばかりをやっている訳でもないだろうと、帥嗣はニュースの内容を聞き流す。

案の定、その特集は五分も経たずに終了し、次のニュースへ移る。『涼暮市で起きた通り魔殺人事件ですが……』

突然、ニュースがかなり身近なものになった。帥嗣は知り合いに通り魔もいなければ、殺人現場に遭遇したこともない。が、もつと別のところで、このニュースは帥嗣にとって身近なものだった。

涼暮市。

帥嗣の住んでいる、小さな田舎町のことである。

自分の住んでいる小さな町での事件ともなれば、興味を持たないはずがない。もつとよく聞こうと、帥嗣はテレビに見入る。

『以前、犯人は特定されておらず、現在警察が
「いやー、良い湯だった」

そこで、風呂から上がってきた昴が、さも当然のようにテレビ番組を変えた。最初についていたバラエティー番組。犯人の情報の代わりに聞こえてきたのは、芸能人達のバカ笑いだった。

チャンネルを変えたのが帥嗣の義理の姉であり、現在の保護者である茆柳昴カヤマナギスバルのために、帥嗣は特に何も言い返さず、黙ってテレビに背を向けた。言い訳のように、どうせ犯人は捕まっておらず、あのニュースからそれ以上わかる内容は無いと心の中で言うておいく。昴は帥嗣の保護者とはいっても、小遣いを等ももらっているわけではない。むしろ逆に生活費を入れている。

名目上保護者であっても事実上ただの同居人、いいとこ姉だ。だが帥嗣は明るい性格の昴を疎ましく思ったことは一度もない。保護者として名前だけでなく、色々世話もしてくれているのでありがたく思うことはあるが。

そして、昴の容貌はかなり美人　美女と言ってなんの問題がない程である。二十歳の年齢以上の艶と張りのある肌。風呂上がりの所為かかなりの露出度の軽装の上、長く伸びた髪が生乾きで湯気の立っている姿はなんと艶めかしい　はずなのだが、毎日のことなんで慣れた。

第一、自らの恩人に対し、そういつた感情を抱くほど、帥嗣は不義理な人間ではない。彼が元来、堅物であるのもその要因の一部ではあるが。

それでもとりあえず注意だけはしておいた。さすがに慣れても、帥嗣は落ち着かないものは落ち着かない。来客があつた場合、昴本人だけでなく、帥嗣も困ることになる。

「ねえ、昴さん。もうちょっと服着たらどう？寒くない？」

帥嗣が直接的に、色っぽくて落ち着かないので服を着てくれ、なんてとてもではないが言えるはずもないので、オブラートに包むというより別の話題から遠回しに言った。昴は裏の意味を察しないので、帥嗣が言っても無駄なのだが。

帥嗣の気持ちを他所に、昴は踵を返して台所に入っていく。

「んー？」

昴は冷蔵庫から発泡酒を取り出しながら、適当に背を向けたままこもった声で答える。

振り向いた昴の顔には嫌らしい笑顔が張り付いていた。

「アタシの心配してくれるのか？あはは、アタシもずいぶん繊細に見られるようになったもんだなあ。それとも、おまえが大きく育ったってか？オネーサンはうれしーよ。きしし、ほら、おまえも飲めっ！冷めた体も温まるぞ！お前は心も冷めてるから余計飲めっ！どんどん飲め！」

昴は酒も飲んでもないのに酔い始めた訳ではない。元々こういう性格なのだ。

帥嗣は今のところ法律を破るようなことをするつもりもなく、酒にも興味がなかったので断った。

昴は断った帥嗣が断つたことに白けることなく、発泡酒のプルタブをあけて一気に呷った。その後、自分のために持つてきておいたストックの内、一つの缶を投げ顎で俺をさす昴。真似して一気に呷れの合図。進めたことを諦めたわけではなかった。

帥嗣は投げられた缶をあわてて受け止め、逡巡の後、断つたら後が怖いので、グツと流し込んだ。

とはいっても、普通から見ればしらせるような飲み方。が、極端にアルコールに弱い帥嗣にとっては限界に近い飲み方だ。

帥嗣はすぐに頭がクラクラしてきた。

そんな帥嗣を面白がってか、昴は立ち上がり発泡酒を持ったまま近づいてくる。帥嗣は本能的にも経験的にも危険を感じとっていた。「オネーチャンは『余計に飲めっ！』つつたる？ベロンベロンのグワングワンになるまでアタシに付き合えっ！」

昴は鼻摘んで口を無理矢理開き、帥嗣の頭上に構えた缶を傾ける。勢いよくだらしなく開かれた帥嗣の口腔に、発泡酒が注ぎこまれる。帥嗣は心中で叫んでいたが、実際は声になっっていなかったし、これ以上先下手に息すると酒が気管に入りかねない。帥嗣は腹を据えて飲み下して覚悟した。

帥嗣が覚悟したのと同時に、昴はさらに缶を傾け、中身を捨てるように逆さまにする。

口という名のコップの中にそそぎ込まれる大量の酒。当然入りきらないものはあふれ、肌を伝い服を濡らす。昴は構うことなく缶をひっくり返したまま。

不快感が酷いはずなのだが、帥嗣はそれさえも感じれないぐらい感覚が麻痺してきた。視界さえもゆがみ、ひずみ、かすみ始めた。

薄れゆく意識の中、昴の心配そうな顔とおもしろそうな顔が入り交じった顔を見た気がした。その表情もすぐ消える。

心配そうな顔が見えた理由を考えられる程、その時俺の頭は活動していなかった。

* * *

「うう、頭痛……」

ベッドから体を起こしたときそんな言葉が全身を駆け巡った。

酒に酔いやすい代わりに酒が抜けやすい帥嗣にとつては生涯初の二日酔い。想像以上の辛さに帥嗣は思わず頭を押さえた。

あんな急性アルコール中毒になるような飲まされ方をすれば当然と言えば当然だ。実際、帥嗣が倒れたのは軽い急性アルコール中毒が原因だろう。

今何時だろうか、そう思い帥嗣は枕元に置いてあるはずの時計に向かつて手を伸ばして探してみる。すると何か手に当たったので、とりあえず掴みあげて目の前まで持つてくる。

何故か、フカフカモフモフする。そして茶色い。

帥嗣は不思議に思い、目を凝らしてよく見てみる。次第に暗順応して、手の中にある物の全容が掴めた。

「……クマのぬいぐるみ？」

疑問系なのは、帥嗣の部屋にその様なぬいぐるみはなく、また家の中でそれを見た覚えもなかったからだ。

作り物の可愛らしい目がこちらをじつ、と見つめている。

帥嗣はその姿に若干なごみながら、辺りを見回してみる。窓から漏れる薄い月明かりの中、はつきりとはないが大体の雰囲気はつかめた。

全体のイメージからすれば家具を真白に統一した、清潔感あふれた調和のとれた場所だ。ところどころにポイントして置かれたファッショングッズがセンスの良さをかもし出している。

帥嗣はそこでようやく、該当する場所を思い出した。よくよく見れば、そこは帥嗣の義理の姉である昴の部屋だった。

「やっと起きたか。いや、悪いな！心配されたのが嬉しくて、すっかりお前が酒に弱いのを忘れてたよ。でもだからってなー、いきなり

倒れる奴があるか？アタシに付き合えるぐらいもうちよつと成長しな。社会に出てから困るぜ？」

頭を小突く昴。ほんのりとシャンプーの香りとアルコールの臭いが鼻をくすぐる。

雰囲気から察すると、今はほろ酔いらしい、と痛む頭で帥嗣は思った。頭を叩かれると響くため、苦言を呈したいところだったが、布団まで運んでくれたのだからと、帥嗣はやめておいた。

そもそも昴が無理矢理飲ませなければ、運ぶ必要もなかった、というのは帥嗣の頭の中にはなかった。

「でもなんで、昴さんの部屋に……？」

昴さんの前で黙り込むわけにもいかないのです、頭が痛いのを押し詰めて疑問を口にした。

帥嗣はできれば、夜風にでも当たりながら話したいが昴に寒い思いをさせるわけにはいかない。それに、この家に庭や縁側などあるはずがないので、それは叶わぬ願いだ。

「リビングからお前の部屋、遠いからこっちにつれてきたんだよ。

この前まではすげえ軽かったのにさー、さすがに今じゃきついのなんのつて。おつきくなつたなー、オネーチャンは嬉しいぞう？」

汚れなき白い歯を見せ、にんまり口を歪める昴。ついでに、帥嗣の髪もクシャクシャ撫でた。

近くで見れば、白っぽい肌は少し赤く染まって酔っている様がよく分かる。でも、帥嗣と違い、昴は全然平気で、自我もはっきりしている。

「オネーチャンはまだ飲むから部屋に帰れ。どうせもう飲めないだろ？」

その通りだった。これ以上付き合えと言われれば、帥嗣もさすがに逃げる。

言われたとおり、布団から出て部屋から出ていく。

おやすみ、と笑顔で見送られ昴の部屋から出ていく。

「酒がもつと飲めるようになったら付き合えよ？オネーチャン、今

はそれが楽しみなんだからな。家族は大切だからなあー」

出ていく間際、そう昴は小さく呟いた。その言葉だけで帥嗣は、無理矢理酒を飲まされたことも全て許せてしまう。

帥嗣の場合、今が夜中ならば深く眠ると明日の朝にはアルコールは抜けている。帥嗣は今日あったことを一切合切全て水に流し、自分の部屋に入るや否や床についた。

「ちわつす」

「よっ!」

そんな短い会話で弥彦との朝の挨拶を済ませた。

弥彦と帰るのは日によって別々だが、朝一緒にに行くのは決まって弥彦一人だけ。帥嗣には弥彦以外にも友達は多くいるが、他の友人は朝練があつて朝がもつと早かったり、朝が苦手で行くのがもつと遅い。

そういうわけで、弥彦と帥嗣はいつも二人で登校している。二人は毎朝顔を付き合わせているだけに、親友と呼べるくらい仲が良かった。とは言つても出会つたのはつい最近、高校に入つてからだ。

「そついえばさ、昨日ふと思つたんだけど、『プラスチック』と『ポテトチップ』ってどっか響きが似てるよな」

「いや、全然似てない。『チツ』しか被つてないだろ」

「逆に言えば、『チツ』も被つてんだぜ？」

「確かにそうかもしれないけど、やっぱり似てないとおもつぞ、弥彦」

「なよるて似がき響かつどてっ『プツチトテポ』と『クツチスラブ』、ばえ言に逆」

「響きが似てるってことより、咄嗟に文章を逆から喋れる弥彦のスキルの方がよつぽどすごいと思うぞ？逆に言えばの使い方をも根本的に間違つてるし」

「ついでに知つただけど」

「完璧に無視かー」

「『プラスチック』に『プラスっぽい』って意味はないんだな。高校生になつて初めて知つたよ」

「僕は『プラスチック』を知らなくても高校生になれるってことを、高校生になつて初めて知つたよ」

他愛のない会話。

でもその日は、いつもと少し違っていた。

「そついやさ」

唐突に話が変わられ、帥嗣はビクリとする。

とりあえず、笑った顔もせず苦い顔もせず今までと変わらないであらう無表情ともとられそうな顔で俺は振り向いた。

弥彦が唐突に話題を変えるのはいつものことだったが、聞かれたくないことがある帥嗣にとって、帥嗣は話題転換の度にびくつかないければならない。

「最近どうなのよ、ん？」

弥彦の話の切りだし方はいつも曖昧。

なので、帥嗣は当然聞き返した。

「ん、ってなんだよ。はつきり言えよ」

「またまた、隠しちゃって。知ってたんだぜえー？」

弥彦は嫌らしい笑顔を浮かべ、俺を肘で小突く。帥嗣は鬱陶しそうにそれを叩き、再度訊き直した。

「だからなんだよ。嫌な奴だな」

「嫌な奴……うーん、最高の誉め言葉だな」

「キモい奴だな」

「と、友達にキモいって言われた……」

「キモいは傷つくのかよ。そういう部分が益々キモい」

「に、二度も言われた……親父に言われてトラウマなのにつ！」

「随分はっちゃけてる親父さんだな……」

息子にトラウマになる程、キモいと言う親父。

その光景が色んなトラウマになりそうだった。

「で、ホントなんなんだよ」

話が半分脱線したので、帥嗣は再度弥彦に尋ねた。

一拍、考えるような間を置いて、弥彦は軽い口調で切り出した。

「結構噂になってるぜ、お前と白前の事」

「あ、ああ……」

帥嗣は尋ねたことをすぐに後悔した。

白前 ノカガミビトトキキ 白前均時とは帥嗣の彼女だった女性だ。もっとも色々あって一月前に別れ、帥嗣としてはあまり掘り返して話したい話題ではない。

もしかすると、最初に話をはぐらかしたのは、その為かもしれない。

きっとそんなことはないだろうが。

弥彦が意識したとするならば、こういう場合むしろ、飄々と傷に塩を塗り込むような聞き方をするはず。

「まあ、色々あって……」

言葉を濁すしか出来ない帥嗣。

自分から聞いておいて心象の良くない切り返しではあったが、これ以上の反応を帥嗣は思い付かなかった。

「色々ってお前なあ……」

「じゃあ、ドロドロあって」

「ドロドロって愛憎劇？」

「ああ、実は二人は兄妹だったりする。昼ドラの世界だ」

お互いが苦い顔をする。

誤魔化した気まずいだけだった。

「それは置いといてさ、本当のところ、俺は心配してるんだぜ？だって高校のうちから……なあ？考え直したらどうだ？」

よもやあの弥彦の口から心配事を吐かれるとは、帥嗣は思いもしていなかった。

なので帥嗣は軽くあしらうように、そっぽを向きながら返事をする。

「そんな大事じゃないだろ」

そう、結局終わった 終わらせたことであって、現在のことではない。均時には悪いことをしたと思っっているが、戻りようのないことだ。

しかしながら、男女カップルが別れたぐらいで、弥彦は何故深刻

「お前そんな事誰から聞いたんだ！吐け、吐け、ハケエエエエエ
！！！」

あ、結構楽しいかも……。

帥嗣が半ばヒステリーを起こしながら快感を目覚めている最中、
弥彦が一人の名前を吐いた。当然上手く言えるはずもなく、何度も
繰り返しているうちに弥彦は舌を噛んだ。

が、名前を聞き出した帥嗣は弥彦を用無しと言わんばかりに投げ
捨てた。道端に捨て置かれた弥彦の姿は、あまりに憐れだったが、
朝とはいえ、場所は商店街。その時間、そんな場所でうつ伏せに倒
されていては晒し者以外の何でもない。

憐れというより、残酷なだけだった。

それでも帥嗣は弥彦を歯牙にもかけず、学校へ。

別に普段からの恨みをついでに返したわけではない。断じて違う。
それにしても噂に背びれ尾ひれがついたところでこうはならない
だろう。それほどに話が歪んでいる。むしろ真逆だ。

どうやったら事実と噂の内容が正反対の極地まで行くのやら、と
考えている内に帥嗣は一つの危惧に至る。

このままだと学校での立場というより社会的立場が危ない。
今まで幾度となく人の噂話をしてきたが自分がされる側になるな
んて思っても見なかった。今までやられてきた人々はこんな心境だ
ったのだろうか？

それならば悪いことをした。謝る。だからこんな事をしないで助
けてくれ！頼む！

意味もなく懺悔しても始まらない。

早く何か対策をたてなければ、と帥嗣は歩を速めた。
噂に疎い弥彦に伝わったぐらいだ。当然教員にも知れ渡っている
だろう。

帥嗣は教職員がこんな馬鹿げた噂を信じないことを切に願うしか
ない。

秋色

もしかしたら、流石にないと思うが、万が一、万が一にもだ。教

職員が信じてしまったら……笑えない冗談だ。考えただけでも恐気が走る。下手をすれば停学も覚悟しなければならぬだろう。

「んなことになったら、昴さんに顔向け出来ないっての……」
比喩ではなく、本当に。

首から上がなくなってしまうかもしれない。

悪態ではない、しっかりと存在する可能性だ。

そのおかげか、おそらく生涯で一番速く走っている今現在、後ろから、

「お、覚えてるよ……」

なんて何処の三下悪役かと思わせる台詞を発して倒れた事なんて気づくはず無かったのは言うまでもない。

そして、SHR終了後に遅刻して学校に着いた瞬間に、弥彦に左ストレートを決められることも、俺にとって言うまでもないことでもあり、知るよしもないことだった。

北に行けば、

「○○君から」

南に行けば、

「××さんから」

東に行けば、

「ちゃんから」

西に行けば、

「から」

上に行けば、

「部の後輩から」

下に行けば、

「部の先輩から」

e t c . e t c

「はあ……」

ため息が出るほど同じ様な言葉を度々聞きいた為か、帥嗣は頭痛を覚えた。それ以外にも弥彦に殴られた胸の辺りも痛い、今は気にしないでおくことにしよう。弥彦なりに手加減して、顔にやらないかっただけでもよかったと思うべきだ。

どちらにしたらって、帥嗣にとって一番痛いのは周りの視線に変わらない。

あるものは嘲笑を込め、またあるものは至福を込め、また別のものは冷徹さを込めた視線を向ける。

さようなら俺の明るい未来。

こんにちは俺の絶望の未来。

餓死寸前で目前の食料をまるまると太った大富豪に食べられた気分だった。

非常に噂の根元が憎い。

秋色

いや 憎かった、と言っべきなのだろう。

その根元はすでに見つかったのだが……どうも諸手を上げて喜べない。呆れにも似ていて、困惑にも近いような複雑な感情が帥嗣の中に渦巻いていた。

何にせよ事の真相は確かめなければならぬのだ。今は午前中に奔走した成果で、なんとか昼休憩までには間に合った。時間としては余る程にある。

でもまさか、噂されている張本人である帥嗣自身も、ここに辿り着く事になるとは思っていなかった。

学校特有の無機質な扉の前、その上には一年四組 自分の教室の札。ほぼ毎日見ているはずの扉なのに、先程出たばかりの扉なのに、帥嗣は開けるのに戸惑った。

まさに灯台もと暗し、と言うより犯人は灯台の中にいたようなものだ。

それでも開けないわけにはいかず、帥嗣は一思いに開けた。

「おお、犯人さんは見つかったか？」

「あ、ああ……」

ドアから一番近い席で菓子パン食べている弥彦に、目に見えて分かるほどの暗さで返答した。

そうなるのも無理はない。噂の犯人さんは目の前にいるのだから。

「まさか犯人がお前だったとはな、弥彦！」

「衝撃の新展開だなあ、おい!？」

……いや、犯人は弥彦じゃないけどね。

何となくからかいたかったただけだ。

別に殴られた意趣返しをしたかったわけじゃない。

弥彦も冗談と分かっているらしく、深く突っ込んだりせず、通り過ぎていく帥嗣を見送った。

机を強引にかき分けながら、真っ直ぐ突き進む。静かな食事を邪魔されたクラスメートからは嫌な顔をされたが、謝っている余裕がない。精神的にも、肉体的にも、帥嗣は結構まいっていた。

「ちよつと来い」

「あ……」

帥嗣は怒気に含んだ声で、静かに小さく言い、その“犯人”の手を取る。

平然と弁当を食っていたが、そんな小さな事を気にしている時じやない。無理矢理にでも連行して話をしなければ。

性格からして少しぐらい抵抗すると帥嗣は思っていたのだが、彼女は終始押し黙ったまま俯いて、最後のほうは自らの足で着いてきていた。

そんな彼女を更に強く引つ張って上に上る。

目指すのは屋上。

この時期なら誰もいないし、何より表向きとしては立ち入り禁止となっている。詳しくは知らないが、昔飛び降り自殺があったらしい。

重厚感のある鉄の扉は見た目より存外軽く、ギイという音と引き替えに、すんなり屋上へと通してくれた。

立ち入り禁止なら鍵ぐらいつけておきそうなものだが、つける度に何者かに壊されるので学校側はもう変える気さえないらしい。

学校の屋上はこの田舎町では一番空に近い場所。

遮るものがない所為か、冬の冷えきった刃物のような外気を巻き込む強い風が、屋上に立つ二人の身体に吹き付ける。流石にそんな吹きさらしの場所じゃ話しづらいので、入り口の陰まで犯人を引張ってつれてきた。

そこで、ようやく犯人の細腕を放した。

位置関係は俺がフェンス側、犯人が建物側。別にこいつが逃げたところで居場所なんてすぐ突き止められるし、そもそも足の速さで負けるはずがない。こいつの足の速さは太鼓判付きだ。

短い重い沈黙が流れるのを待ってから、帥嗣は閉じた唇をようやく開き問いただし始めた。

「お前……どういっつもりだよ」

諸悪の根元、犯人　　白前均時に。

均時は強い語調の帥嗣の問いに対して一切反応せず、俯いたままだった。聞こえているのかさえ、疑わしいほど。

怯えも、動揺も、何もない。

糸の切れた人形のように、意図のない人。

「どういつつもりなんだ？」

もう一度、帥嗣は静かに尋ねた。

なるべく冷静になり声質に注意する。さっきより無感情な自分をわざわざ演じ、威圧感をなくしたつもり。

そうやって、自分を抑えなければ、ただ怒りに任せて均時を殴ってしまいそうだった。罵声を浴びせてしまいそうだった。話を聞けそうになかった。

恐らく相手が均時でなければ、こんな風に真剣にならなかつたらうし、そもそもこんな感情にならなかつたらだろ。

自分の中にそんな感情が今まで流れた事がなかつた所為か、帥嗣はその感情に対する処理の知らなかつた。小さい頃から、感情を抑えることをしすぎたツゲが、今ごろになって帥嗣に回ってきた。

だから、嘘をつくしか、帥嗣には思いつかない。

そして、それがどういう結果を招くのかも。

冷静をよそおつても、帥嗣は冷静じゃない。

「スイが悪いのお！」

帥嗣の言葉が引き金になつたようにわめき散らし叫ぶ均時。

「全部全部スイが悪いのお！私何も悪いことしてないのお！」

「お、おい……」

流星に、帥嗣はたじろいた。

こんな風に荒れた均時なんて初めて見たし、何よりきつく閉じた目からこぼれ落ち続けている、悲哀な涙が痛々しかった。

そしてなにより、少し前まで当たり前で、その少し後から決して許してはならなくなつた、呼び名が、痛かつた。

均時以外を使うことのない『帥^{スイ}』という音読み。

「駄目なお！駄目なお……！」

ひたすら意味のない言葉を羅列するばかりの均時に、原因を作ってしまった帥嗣にかけられる言葉なんてあるはずが無い。均時に声をかけることも、触れることも、帥嗣にはできなかつた。

「うええ……う、く……ひっ……ううう……」

均時のわめき散らすさまを見て、倒錯した同情を感じる帥嗣。そんな情けない帥嗣にはそこに立ち尽くす以外に、一体何が出来るというのか、分からなかつた。

そんな事にまた心に傷をつけたふりをする。別れたときも傷ついたらふりをして、ついさっきまで弥彦と馬鹿みたいに笑っていたというのに。

最低すぎだ。

心の中で一人、自分で自分を嘲る。

けど、最後に一度だけ、帥嗣は自己満足じゃないとはつきり言える感情で、眼前の均時に触れたいと思った。

いつものように無知な空の感情でも、悲観主義な理論思考でもない、帥嗣の感情が付き動かす。

そつと、今にも壊れそうな硝子細工に見える均時に手を伸ばさず。きつく閉じた均時の瞳にはそんな帥嗣の姿なんて映らないだろうし、開いたところできつと涙で歪んで何も見えやしないだろう。

すぐそこに、そんな均時の顔がそこにある。でも、手は鎖でつなぎ止められてしまったかのようにひたすら重く、一メートルもない距離は果てしなく遠かつた。

しかし、そんな手でもいつか届くと信じ、ひたすらにゆっくり伸ばし続ける。

だが、折角上がりきつたその手は虚しく空を切つた。

ちよつと帥嗣の手をかくくぐるようにして、均時は目を閉じたままかけ出している。

秋色
俺が気がついたときには、もう鉄の扉の閉まる音が聞こえてきた。

「はあ……何だろうなあ、俺……」

三歩下がって、フェンスにもたれかかる。ガシャンと軽い金属音で軋む。

そうしてもう一度溜息をついて空を見上げる。

嫌なくらい晴れていた。綺麗な秋晴れ。雨は到底降りそうない。

「これならちよっとくらいいても、大丈夫だろ」

昼の授業はサボることにした。

当然、帥嗣の帰り時は足取りが重かった。

引きずるような足取りで商店街を歩く。

自分以外の人々は、ほとんど目に入っていない。

夕食の買い出しに来た中年主婦や母親に連れられた年端もいかぬ少年少女。そんな人々が周りにいるはずなのに自分は絶対的な孤独感に苛まれていた。

降り注ぐ秋の柔らかい陽光も、迫り来る夜の気配も、気づかない皮膚を隔てた外側と内側で隔離されているような気分だった。

いつもなら周りにいるはずの友人も、あんな噂が流れたばかりでは近寄りがたいらしく、帥嗣とまともに顔を合わせようとしなかった。

唯一気遣ってくれたのは、弥彦ぐらいのものだ。

それでも一人は一人。帥嗣が逃げるようにして学校を出る事になるのは必然だった。

一方、均時とはいうとあの後、弥彦から聞くと体調不良を訴え早退したらしい。

帥嗣がそんな風に落ち込んでいる間に、知らぬ間に家に着いていた。

相当帥嗣の思考が止まってしまってるみたいだ。

「ただいま」

条件反射のような挨拶。

でも、昴だけには心配して欲しくない。

だから、今までにない笑いを作るような気構えで家の中へと臨んだ。

それも全くの無駄。

「おまえは嘘をつくのが下手だな」

帰ってすぐ玄関で会った昴に一瞥され、

「部屋に入って寝てる。腹が減ったならむすびでもつくって部屋の

前に置いててやるから」

と簡単に見破られてしまう。

何も喋ることなく分かってくれている、昴の優しさが帥嗣には嬉しかった。ここはありがたく優しさを頂戴しておくことにした帥嗣。

帥嗣は変わらず汚い部屋に入り、布団へダイブ。

心地よい眠りの世界へと俺は逃避していった。

* * *

その日は珍しく夢を見た。

何年ぶりだろうか、と帥嗣は思う。

昴の家に来たばかりの頃はよく見ていたのだが……いつから見なくなったのか思い出せない。

帥嗣は背景は確かにあるのだが意識してみようとす。が、焦点が定まることなくぼやける。

いかにも夢らしい。

うやむやで、あやふや。

大事な部分ははっきりしてくれないと困るが、こつこつ細かいところはぼやけても構わないか、と口の中でぼやいた。

「くすつ……」

「ん？」

誰かの声が聞こえたら、思ってもいないのに声が出た。自分が思っているような声が出ない。

回想、だろうか。

帥嗣には誰かに笑いかけられた、夢に出てくるほど強い記憶がなかった。

「どちら様？」

笑い声の主は姿さえ見せず、ただ忍び笑いを繰り返す。

その笑い声にも、聞き覚えはやはりない。

不明瞭な相手に、若干の苛立ちを覚えながら相手の対応を持つ。

「誰が良かった？」

悪戯っぽく、笑いを混ぜながらようやく相手が言葉らしい言葉をつぶやいた。

「どうやら、女性らしい。」

声もどこか聞き覚えのあるものがあつた。

夢の中の俺はおどけて、相手に分からない名前をあえて出した。

「できれば、昴さん」

「誰、それ？」

「俺の愛する姉さん」

「うわぁー……シスコンだよぉ」

くすり、とまた笑う。でも、相変わらず影も形もない人。

帥嗣の独り言のようにもとれた。

「榊君って面白いね、ほんと」

「と言ひ、思い出したようにまた笑う。」

「なんだよそれ。冗談だ」

「大丈夫分かつてるよ。ほんと、榊君って面白いけど、律儀だな

あ

「そりゃね。姿も形もない相手だから仕方ない」

皮肉めいた言葉を相手に投げかける帥嗣。

帥嗣 夢の中ではない、今の帥嗣は相手のことを思い出していた。そしてこのあとに続くやり取りも。

「あはは、ごめんごめん。そんなに皮肉らないですよ。自己紹介するからさ」

「そりゃどうも」

「私の名前は白前均時だよ。漢字は……分かるかな？」

「一応。クラスメイトの名前だしね、ちゃんと覚えてるよ」

「はは、憶えてるなんて凄いなあ……。嬉しいよ」

そうこれは、榊帥嗣と白前均時の、付き合う前、初めて会話らしい会話をした日の話。

帥嗣はグラウンドの隅のほうで友人のクラブ活動を校舎に寄りか

かつてみていて、均時が窓越しに話し掛けている。

そこまでようやく思い出した。

「それで、何か用？」

「別に用なんてないよ。ただ、暇なものどうし、ちょっと話そうかなって」

均時は身を乗り出して、満面の笑みを帥嗣に見せつける。

「別に……暇じゃないよ」

「普通、校舎の壁にもたれかかって、ボーっとどこかを眺めている人は、暇人って言うと思うよ？」

最初とは違って、たはは、と情けない苦笑を声にする均時。

感情を隠そうともしない、表裏のない喋り口が帥嗣の笑いを誘った。

「俺はただボーっとしているわけじゃない。えらいことを考えようと思っただけだ」

「あれ？それって、漱石のもじり？文学少年だね、榊君って。いや、題名をもじって、文芸少年、とでも言おうかな？」

「いや、分かる白前さんも大概凄いなと思うけど？俺は偶々読んでただけだし」

「偶々読むようなモノでもないと思うけどなあ……」 そんなことをボソリと呟きながらも、愛嬌ある笑みを絶やさないう均時。

帥嗣はそんな均時の顔を見ようとせせず、ただすぐ目の前のグラウンドをまるで遠くにでもあるかのように眺めるばかりだった。

「でもさあ……」

「ん？」

また、均時が話しかけてくる。

同じように帥嗣が生返事をした。

「何で帰らずにこんなところで何してるの？家にも帰らずに。たしか帰宅部だったよね？」

「良く知ってるな。俺は帰宅部だ。白前さんは？」

「うーん、今は私も帰宅部かなあー。この前、陸上部破門になっち

やって」

時期としては入学したてだ。その頃の帥嗣の気を引くには十分な一言だった。

「どうしてか、って聞いてもいいか？」

「あはは、ダメ。秘密なのです」

そう、笑顔のままおどける均時。

この時、ようやく帥嗣はまともに均時の顔を見たが、その顔から辛さや悲しさは見受けられなかった。

「じゃあ、お互い様だ。俺がここにいるのも秘密なのです」

だから、帥嗣は均時のペースに合わせることにした。

「あ、ひどいなー。ちよいダメージ」

「俺も秘密が匂わされただけで辞められて、12のダメージ」

「なぎつじひきつぐ、を、やっつけた」

「俺よわっ!」

「ひととき、は、レベルが7にあがった」

「お前もよわっ!」

「あはは、ノリがいいなあ」

そんなふざけた会話をしながら、ときには均時が頬をついたりしてコミュニケーションをとりつつ、閉門時間までずっとその場から動かなかった。

次の日、帥嗣が待っていた友人から冷やかされたのは語る必要もないことだ。

その日以降、二人は均時が積極的に、帥嗣が消極的に、仲を深めていった。

一ヶ月が過ぎて、二ヶ月が過ぎて、夏休みが来て、そしてそんな夢は帥嗣に、朝まで延々と過去を見せ続けた。

寝む、い。

頭も呆けている。

そんなことが真つ先に、寝起きの帥嗣の頭に浮かんだ。

朝にはそれなりに強いが、起きた直後くらい睡眠の余韻ぐらいは残るものだ。

それに……あの夢は、さすがに衰弱していた帥嗣の精神にはかなり堪えた。夢は眠りが浅いとき見るとも聞くし、単純に疲れがとれていないのかもしれないが。

布団をはねのけ、重たい体を無理矢理起こし、冷たい外気でまどろむ脳を覚醒させる。

部屋の隅にかけてある制服に着替え、鞆の中身を入れ替えてから居間に向かう。

朝早い所為で家の中は静寂に沈んでいる。寂しい空間では会ったが、それはそれで気持ち良い。

居間はいつものように無人。

昴は基本的、朝は眠り姫故に起きてこない。朝起こすと、昴は割と本気で怒るので、帥嗣はいつものように無視。

やることといえば、ブランチになるような食事を残しておくくらいだ。

預かってもらっているせめてもの恩返しとして。

だが、今日は不思議なことに机の上には、一個一個丁寧に包まれたラップにくるまれたオムスビと、ほんの気持ちばかりのオカズのみ。具体的に言えば、タクアン六つ。

脇には手紙が置いてあり、帥嗣は、とりあえず手にとって読んでみる。

『今日は朝から用事だから、これ食っとけ。早めに帰ってくるから昼飯は学食で適当に済ませて、夜は待ってる。いいか、全体一食も

抜かすんじゃないぞ?」

その隣にはちょこんと置かれた百円玉。

.....。

これはからかっているのか?

からかっているというのか?

今時百円で何が食べれるというのだろうか、あの人は。

思っただけだった、あの人なら。

「何!? いつからそんなに物価は高くなったんだ!? 世も末だ.....」

とか何とかのたまいながら。

未だにあの人のキャラってつかめないよな.....。

そんな珍事に少し心を和ませながら、もう一度メモに視線を落とす。

すると、帥嗣は端の方にある一文を見つけた。

『ちなみに、このオニギリは昨日せつかく作ったのにお前が食べなかつた奴を放置しておいた奴だから鮮度の程は知らんが絶対処理しておくように。中つたら罰だ』

再度、黙る帥嗣。

かかれるのは帥嗣にとって別に構わなかったが、何も騙すことを目的みたいに小さく書かないで欲しかった。

これでは騙そうとしているのか、照れ隠しなのか分からない。

帥嗣はもちろん、後者だと信じているが。

「まあ、どっちにしても食べるけど」

食べなかつたら食べなかつたで、想像するだけで怖かった。

とりあえず一口だけ口に含む。

冷たくて硬い。一晩経っているのだから当然だった。

それでも おいしい。普段なら思わず口から出してしまうほど

不味いのはずなのに。

昨日の夕食を抜いたし、よく考えれば昼食も抜いている。だとすると約24時間ぶりの食事になる。当然のように酷い空腹だった。

一応、臭いでも嗅いで腐っていないことを確認しレンジで暖める。

これで少しは食べられるようにはなるだろう。
もう一度、口へ。
ゆっくりと運んだそのオニギリは少しだけ、本当に感じない程、
いつもより塩辛かった。

* * *

当然の事ながら、冬の朝なので家の中より外の方が何倍も、何十倍も寒い。

その寒さに耐えながら、いざ学校へ。

帥嗣がいくら注意力散漫だからといって、学校へ行くことぐらい
忘れないし、戸締まりもチキンとした。服装もきちんとしているし、
靴も靴下もしっかりしている。

しかし、帥嗣は何か忘れていている気がしてならなかった。

「……………何だっけ？」

生憎、忘れたのだから大した用件ではない、と切り捨てられるよ
うな楽観主義者ではない。大事なことでも忘れるときは忘れるし、
些細なことでも忘れないことは忘れない。

小首をかしげながら視線を泳がせながら考えていると、昨日落書
きにつけたしをしたあの掲示板が目映った。

いつもの登校時間より、時間的な余裕はたつぷりあるし数秒とか
からないと思ひ、興味半分に覗いてみることにした。

もしかしたら、忘れていたのはこの事かもしれない。

もし違ったならば選択肢が一つなくなってよかった、で終われる
のだ。

残りの半分はそんな考え。

書いた主は『バカ』と嘲っただろうか。

『アホ』と罵っただろうか。

付き合う必要もなく無視しただろうか。

恐らく、そんなところ、というのが帥嗣の大方の予想。

でも、実際に書いてあったことは、余りに的外れで、余りに白々しい、帥嗣の予想の大きく上を行く解答だった。

『ありがとう』

「……うわ」

思わず、口から漏れた言葉が、白い意気となって消える。

予想外も甚だしい。

これはまるで……、普通に慰めただけじゃないか。

この状況をリアルに体験し少しも驚かないものがいたら、帥嗣はその人を尊敬する。

「これ、どうしょ……」

困った。

返答しようにも内容が思い付かないし、ありがとうとまで書かれたのに返答しないのも薄情だ。

前回みたいな遊びのような気持ちでやって良いのとは違う。

今回はかりはこの二つのどちらか選択をしなければならない。帥嗣としてはなるべく、答えなかったが、内容を考えるにはあまりに時間が無さすぎる。

下手をすると、人の生死に関わることになる。

少しくらい考える時間がほしい。

せめて、今日の夕方まで。

「でも……いいのかも、な」

誰も聞いていないのに、帥嗣は呟く。

「なにか考えてないと、何かしそっだし」

お礼を言ってくれた人には悪いが、帥嗣は逃避に使わせてもらうことにした。

放課後。帥嗣はいつも通りの歩調で帰宅の途についていた。朝、弥彦のことを放置していた所為で殴られたが、それは気にならない。

あの掲示板に対する返答も、決まっていたし帰り路は気楽なものだった。

その代わり、均時の方の問題は一切進んでいない。今日もちゃんと席に座って授業を受けてはいたが、言葉を交わすことは出来ず終い。

クラスメイトの好奇の視線を背に受けながら学校を出て、商店街を人を縫うように進んで、帥嗣の住むに到着した。いつもよりも少し速いくらいのペースになり、帥嗣歩くペースを落とす。

何度も見慣れた、コンクリートブロックに囲まれたタイトなカーブを曲がれば、帥嗣のが見えてくる。

帥嗣にとってこの曲がり角は、今も昔も恐怖の対象だった。

昔は外灯の関係でちょうどお化けのような陰が見えるのだ。

小学生の頃　まだ、昴の家に帥嗣がいない頃、時々泊まりに来ていた帥嗣を脅かす、昴の楽しげな顔と高らかな笑い声が、今でもすぐに思い浮かんでくる。

とても正しく、とても真っ直ぐだった昴は、今もそのまま。なのに、帥嗣は大きく変わった。主に悪い方向に。

そして今の恐怖の対象は、掲示板　ではなく、ちょっとしたトラウマ。

ほんの数ヶ月前、昴のバイクに乗せられてフルスピードのまま曲がったという恐怖体験の所為。それ以来、バイクにだけには一生乗るまいと心に誓った帥嗣だった。

でも、不思議と今、その恐怖は一切ない。

今あるのは新しく思い出の刻まれるご町内の掲示板のことだけ。

「にゃ〜」

「のわっ!?!」

そんな哀愁ある考えも、不意に欠けられた声に、一瞬にして吹き飛んだ。

「何だ何だ!?!」

一体誰が声をかけたのかと思い、辺りを見回す。声の主は何処にも見当たらない。

こんな漫画みたいな状況に、自分が置かれるとは帥嗣は思いもしていなかった。

「にゃ〜」

再び声。その声を頼りに、帥嗣は振り向いた。

猫。

まごうことなき、猫。

毛並みつややかな、でも少し汚れのついた白い毛が特徴的だった。見たことがあるぞ、この猫。

「タマ……か? いや、ニヤアちゃんだったっけ? それともマダムちゃん? この中の一つであることは確実なんだが……」

と、考えているうちにもう一声。

「にゃ〜」

「つてああー! 制服の裾を噛むな! 噛むな! 噛まないからって舐めるな!」

制服がボロボロになったり、ベトベトになる前に、帥嗣は急いで猫の胴体を持ち上げる。

持ち上げてみて初めて分かったが、意外に軽い白い猫の腹部は泥まみれで汚くなっていた。同様に首輪にも。

帥嗣はまず首輪についた泥を拭っている。首輪の喉側には金のプレートがついており、指で丁寧に泥を取ると、『me』と彫っているのが読み取れた。

「そのまま、『ミイ』って読んでいいのか?」

拭ったついでに喉を人差し指でなでてやる。特に抵抗することも

なく、お腹を見せたまま喉を鳴らすミイ。人懐っこい猫のようだ。

「ごうも簡単に手の中に収まるともって帰りたくなるな」

が、そうするわけにはいかない。

懐いて腹部を見せている内にポケットからハンカチを出して綺麗に拭ってやる。完全に綺麗にすることは出来なかったが、少しはマシになっただろう。

「飼い猫のみたいだし、あとは飼い主がどうにかするだろ」

喉を鳴らしている猫を、地面に降ろしてやる。

すると猫はゆっくりと、少しずつ歩いて離れていく。そして、あの掲示板にたどり着く。

「なあ〜」

そこで猫は一鳴きして、じっと何か待つ様に座り込んだ。

待っている相手が帥嗣のことなのかは、分からない。

「猫に好かれても、なあ……」

帥嗣は猫が嫌いなわけではない。それでも、困る。

一番、というか全ての理由は昴が猫嫌い、ということに帰結する。親の仇敵のように嫌っており、昴の唯一無二の弱点。アレルギーも持っている。

とりあえず、猫に関係なく帥嗣自身も掲示板にも用事がある。

「じゃ」

短く鳴いた猫は、帥嗣が近づくと共に、軽くジャンプして塀の上へ。

さすが猫。

そのまま猫らしく俊敏な動きで、路地裏へと消えていった。

帥嗣としては少し飼いたかったが、昴より優先順位は下。諦めることにした。

帥嗣は猫を見送って、前と同じように鞆を開きペンを取り出しノックする。

銀の先の黒い芯が、秋の陽光を反射して鈍く光った。

文字を整える気もなく、前回と変わらない文字を連ねた。書くこ

とは決まっているおかげか、迷いはない。

場所はもちろん『ありがとう』の隣。

「よっと」

文字の出来を確認することなく、掲示板に背を向けて立ち去る。

『甘えるな』

雑な文字だけが、その場に残った。

翌朝は帥嗣にとって生涯で一番、冷や汗をかく朝となった。強気にあんなことを書いて、テレビのローカルニュースを見た時に、

『今朝、未成年の遺体が発見されました。投身自殺と思われる……』
何て耳に入ったら、いくら無頓着な帥嗣でも罪悪感を感じる。

ニュースを聞く限り、幸いそんなことは無かったようだ。

「間違つて……なかつたよな」

確かに最善最良の冴えたやり方ではないとも思つてはいる。

ちよつとした、荒療治。

それは置いておいて、昨日の夜の話。

昴はなかなか帰つてこず、結局真夜中にくたくたに帰ってきた。

おかげで帥嗣が真夜中に起き、炊事する羽目になったがいつも世話になつている分、誠心誠意料理をした。

昴はろくに味わいもせず、食べ終わるなり部屋に戻つて寝てしまつたが。

そして、今もまた眠っている。先程様子を見てきたが、今日は一日、起きそうにもないくらい深い眠りだった。

下手したら二日ぐらいは寝ているかもしれない。

さすがは眠り姫。

調が悪のかもしれないので、下手のなことは言えないが。

体調不良として、昴の職場に連絡を入れておいた帥嗣。

それ以外には別段特に普段と変わった事も無く家を出た。

「いつてきます」

誰もいない玄関に向けて、昴を起こさぬよう静かに帥嗣は言つて家を出る。帥嗣は軽く虚しい気分になつたが、大きい声を迂濶に出せないのも、気持ちを落ち着かせてゆつくり扉を閉めた。

昨日の教訓を生かし、帥嗣はまず弥彦を迎えに学校とは別方向に

歩みを進める。

弥彦は今回の噂を真面目に取り合っていないにしろ、周りの目を気にせず帥嗣と接してくれ、帥嗣としてはすごく助かってはいる。だから、帥嗣にとって弥彦を迎えに行くくらいはやぶさかではない。

「問題が全部片付いたら何かお礼　はしなくても良いか」
ポツリとさりげなく弥彦を貶す帥嗣だった。

ちょうどそのタイミングで突然、内ポケットに振動が生まれる。少し驚いたが、携帯電話をマナーモードにしていたのを思いだし、急いで取り出す。

「あ、弥彦」
思わず声に出してしまった。

先程無意識に貶しただけに、少し罪悪感。

しかも滅多に使わない電話だっただけに焦った。

最初のコールから大分時間が経っていたので、急いで通話ボタンを押して耳に当てる。当然、弥彦の声が電話口に聞こえた。

『あー、帥嗣？』

「それは俺のケータイだし、俺がでないと不思議だろうな」

弥彦の声はやけに鼻にかかっていて、聞こえない事はないが聞き取りづらい。

まるで無理そののようにしているかのような声。

電話口に帥嗣が不思議がっていると、弥彦が相変わらず鼻にかかった声で一方的に喋る。

『風邪引いたから学校休むわ。だから、迎えに来なくていい。ついでに見舞いもいい』

「……………えっと」

弥彦の言葉がうまく飲み込めず、返答ができない。

そんな帥嗣を無視し、弥彦は会話を終わらせにかかる。

『そゆことで』

「あ、ちよつとま　」

帥嗣の制止も聞かず、弥彦は電話を切った。

「何だよ、それ」

この早い会話はサボってどっか行きそうな雰囲気だった。

最後に切れる間際、帥嗣は車のエンジン音のようなものもしっかりと聞き取っていた。

だが、弥彦は鼻声で喋っていたのが帥嗣には妙に引掛かり、疑心暗鬼になるのは良くないと弥彦の主張を鵜呑みにする。

弥彦は人並み外れて丈夫なわけでもないし、担任に何か聞かれたら風邪とでも言えば信じて貰えるだろう。

それきり、帥嗣は弥彦のことを考えるのはやめた。

他にもっと考えることはたくさんある。

とりあえず携帯電話を閉じ、電話にどれくらい時間を使ったかを確認する。そう時間は使うことはなかったが、余裕分は無くなってしまう。

でも、いつも通りに行けば十分間に合う時間だ。今は突拍子がないにしろ変な噂が流れているし、生活を乱すのは良くないだろう。

優等生をしていれば　そんな噂、七十五日待たずとも消える。

が、そんなことをしているわけにはいかなかった。

「くすっ……」

初めて会った時と、まったく同じ反応。違いは今は彼女の顔が見えていることぐらい。

彼女は笑う。

彼女は微笑む。

彼女は見つめる。

彼女は見据える。

「なっ……」

帥嗣は思わず声を漏らした。

灰色のニット帽にタートルネックの無地のセーター。そして洗いざらしのジーンズ。

肌を隠しているような服装の上、一度も見たことのない恰好だっ

たので、100パーセントの自信はなかったが、おそらく均時だ。遠くからでも分かる明朗快活な雰囲気は全く変わっていない。それにまず驚いた。

そして次に、屋上の時のあの乱れようを一切感じさせない雰囲気に驚く。

「あいつ……何やってるんだ？」

制服を着ることなく、遠くから帥嗣を見守っているばかりの均時。視線がついているはずなのに、そんなことを一切気にしているそぶりはない。怯むことなくじつとこちらを見ている。

「くすつ……」

帥嗣が均時の行動を語りかねていると、もう一度遠くの方で微笑む均時。

そして、彼女は帥嗣が迷っているうちに、タイムアップと言わんばかりに駆け出した。

「っ!？」

帥嗣は一瞬躊躇したが、均時を追いかけるために走り出す。

足の速い均時においつけるとは到底思えなかったが、それでも追いかける。

学校には間違いなく遅刻するだろうが、そんなことを気にする意味はない。理由そのものが、視界の中にいるのだから。

小学生の間をすり抜け、青年を押し分け、女性をかわし、顔見知りの生徒を潜り抜け、均時に手を伸ばす。それでも 届かない。

だから、走る。

ただ、走る。

背後から聞こえる怒声や罵声も、無視してただ追いかける。

それでも、均時には届かない。

「くすつ……」

それどころか、挑発するように笑いかけてくる。

余裕綽々の笑顔。

その笑顔が、帥嗣により一層もどかしさを募らせる。

もどかしいのが嫌なら、追いかけてあげなければいいのに。いらいらするなら、抑え込めばいいのに。

帥嗣は感情にまかせて、均時を追いかけている。

分らない。

分からなくていい。

そういう問題じゃない気がした。

ただ、均時を捕まえて話したい。話すことなど決めてないのに、ただ話したい。

そのためにスピードを上げる。

運動能力の差が埋まらない。

商店街を抜け、突き当りに差し掛かる。

その角を均時は、まるで消えるようなスピードで曲がった。おおよそ練習をかなり積んだのではないかと思わせるような上手な曲がり方。

「くそっ！」

感情のままの悪態。

これでまた差が開いた。

帥嗣も拙い動きながら急いで角を曲がる。

「うわって!？」

「っ!？」

曲がった直後、帥嗣は誰かにぶつかった。帥嗣の方に勢いが付いていたせいで、相手を突き飛ばす形になり、帥嗣自身も前のめりに倒れこむ。

普段の帥嗣ならいの一に相手に相手を起こし、謝るところだったが現状ではそういうわけにはいかなかった。

辺りを見回してみる。

均時は何処にもいなかった。

「つてー……！」

「あ、すいません」

下から聞こえた声で、呆然と立ち尽くしていた帥嗣は我に帰った。今から焦って追いかけたところで街路に逃げ込んだ均時を見つけようがないし、見つけたとしても捕まえる自信がなかった。

そして、冷めた頭で考えると、何を話していいのかも。

まずは自分がどうしてあんなことをしたのか、今からどうするべきを考えるべきだった。

帥嗣は跪いていた体制から身を起し、手を伸ばして押し倒してしまった人を起しにかかる。

押し倒してしまった青年は頭を左手で押えながら、帥嗣の手をつかむことなく、かといって手を使うことなく、体のバネだけを使って起き上がる。

大した運動神経だった。

起き上がると身長がそうないらしく、帥嗣よりも目線が下に来る。かなり小柄な体型で身長は目測で160センチ有るか無いかぐらいだった。

それでも年相応の顔だちをしているなら、おそらく帥嗣より二、三歳上、こんな時間に私服でうろついているならば大学生らしい。

高校生の身分でこの時間にふらついているという例外が自分なだけに断言はできないが。

服装は極めて普通。まっ白いTシャツの上にダウンジャケットを着、デニムを履いただけの、着こなし方は上手だが目立たない格好。特に変な仕草をすることなく、左手で頭を押さえながら右手をだらりと下げ、痛みを引くの待っている。

他に身体的な特徴らしい特徴を言うならば手足がやけに長いことだ。

が、そういつた身体的特徴を差し置いて、最も目立つのが頭髪だった。

青。

藍色などではなく、絵の具から出したような原色の青。

人口の少ない帥嗣の住む涼暮市でも最近では茶髪や金髪に染める人間は増えてきたが、この街で青に染めている人間を帥嗣は見かけたことない。

おおよそ、この街には似合わない色だった。

先ほどまでいた商店街を歩けばさぞ目立つことだろう。

そんな青年の容姿に帥嗣が面食らっていると、青年の方から話しかけてきた。

「んな、急いでどこ行くつもりだったんだよ、お前」

「あ、すいません、ぶつかってしまって」

「それはいいんだけどな、別に。それより会話を成立させろっついの」

「すいません……。ちょっと人を追いかけてて」

「人って、人だよな？ヒューマンビギンズのことだよな？」

「ええ、そうですけど……」

気さくな話口調ながら、年上の青年に対して念押しとよくに聞かれ、尻込みする。

「追いかけてたんだよな？」

「はい、少し距離は離れてましたけど」

「つかしーな……？」

「え？」

「いや、誰も通ってねえぜ？」

「……はい？」

「だから、お前が追いかけてるような人間らしき有機物はここを通過してねえつつつてんの。そこんとこを不思議に思ったただけだ」

せつかく落ち着いてきた帥嗣の頭が再度混乱する。

先ほどまで追いかけていた均時は、一体なんだというのか。

帥嗣は狐につままれた気分になりながら、再度確認する。

「本当に……本当に誰も通らなかつたんですか？」

「ああ、本当に不思議なことが世の中にはまだまだいっぱいあるな

」

青年は帥嗣の方に一切目を合わせず、明後日の方向を向きながら、さつきまで痛そうに左手で押えていた後頭部を髪が乱れることも気にせず、面倒くさそうに搔いている。

「どうやら痛みは完全にひいたらしい。」

内心、大事に至つたらどうしよう、などと焦っていた帥嗣は安堵のため息をついた。

「そうではなくて。」

青年の行動は、とても不思議に思っているは考えられないものだった。

「怪しすぎる。」

何か隠していると考えの方が自然だった。

「……………」

「……………」

横たわる重い沈黙。

何か隠していることがばれたのを察したのか、バツが悪そうに片目をつぶりながらも、誤魔化す様に頭をかくのをやめようとしない。おかげで髪は寝起きかと思わせるほどに乱れていた。

「あの……本当に誰も通りませんでしたか？」

二度目の確認。

青年の雰囲気と合った行動の所為か、彼に対する気遅れに様なものは無くなっていった。

「あー、うー、なんつーか、通つてはないんだけどなー……………」

やはり、何かを隠していたらしい。

「言つべきかどうか迷っているだけのようだ。」

「根が正直なのかもしれない。」

「嘘が下手すぎる。」

「だあばらっしやい！」

突然、形容のしようがない規制をあげると本当のことを喋りだした。

「確かに来た、一人、もんのすごいスピードでな。お前みたいにぶつかりはしなかったけどな」

「その件はすいません」

せめてもの意趣返しのようにシニカルに青年は言う。

それは帥嗣も悪いと思っていたので、素直に頭を下げた。

その所為で青年はますますバツが悪そうに、続ける。

「来たと思つたら、ちょうどお前が立つてるあたりの塀をよじ登つて民家の中に入つていった。で、その直前にここに来たことを誰にも言うな、つてもものすごい形相でいってくんだけ？そこまでされたら断れねーだろうが」

帥嗣はちゃんと均時らしき女性を追っていたことがはつきりした。厳格でなかったことに、再度安堵する。

「あ、でもたぶんそこにはいないぜ？そりゃ壮大な音を立てながら走つてつたからな」

帥嗣もそこに未だに均時がないのは承知の上だった。

それにもう、無理矢理均時を捕まえるつもりはない。

もう少し自分の気持ちを整理してから、会うつもりだ。

幸いなことに明日明後日は休日で学校に行く必要はない。

「んで、これもなんかの縁だから聞かせてくれないか、話」

「え、でも、俺これから学校なんですけど……」

こんなところで追走劇を繰り広げたとはいえ、今から行けば二時間目には間に合う。

逢いたくない本人は学校に行く気がないみたいだし、会わなくても済むだろう。

秋色

「遅刻もサボりもう一緒だつーの。それに、ぶつかられた謝礼もしくは本当のことを教えた報酬も貰ってねえ」

「ぶつかったのは良いって言ったじゃないですか。それに嘘をつい

たのはそつちでむしろ俺が」

「ペちやくちやいってねえーでどっか喫茶店入るぞ。俺は腹が減ってんだ」

そんな事を言うと左手で襟首をつかむと、片手とは思えない腕力で引きずっていく。

「あ、あのっ！」

「うっせ。黙つとけ」

帥嗣はその後、70メートルも離れた喫茶店に連れ込まれるまで抵抗するすべなく引きずられることになった。

別の噂が帥嗣に立ったのは言つまでもない。

今日初めて会ったばかりの青年にせれるがまま喫茶店に入店させられた帥嗣は、ウエーターの支持も聞かずに勝手に窓際の席に座った青年について行く外なかった。

なるべく他人と思われたい帥嗣だったが、同じ席に着いた以上、間違えなく知り合いと認識される。

逃げるという方法もなかったのだが、ここまで片腕で引きずってきたという青年の腕力の前に、何も抵抗ができなくなっていた。

「あ、その店員、お冷おかわり」

「た、ただいまっ！」

帥嗣が片腕で引きずりこまれた店員も、帥嗣同様萎縮していた。

それを気にせず、すぐにお冷を空にしてメニユーも頼まず、お冷をお代わりするこの青年はかなり大物か、それでなければただの世間知らずだった。

「んで、まず言っとなきゃならない大事なことがあんだけど」

お冷を頼んですぐ帥嗣の方を向き、フランクに話し始める。

「はい、なんですか？」

「実を言っとな……」

「はい……」

唐突に真剣になった青年に、固唾を飲んで耳を傾ける帥嗣。

「財布落としてな！二十四時間近くなんも食ってねえんだ。奢ってくれ！」

左手だけで拝むように頭を下げる。

思わず帥嗣は人目を気にせず机に突っ伏してしまった。

大物ではなくただの世間知らずだった。

「なあ、頼むよ、この通り！いいだろ？ぶつかったんだから、それぐらいしても！」

「それは……少しぐらい手持ちはありますけど……」

本当に少しばかり。

吹けば飛ぶんじゃないかと思うほどに。

「んじゃ頼むつて！飯奢つてくれんなら、さつき逃げてたやつ捕まえてきてやつからさ！な！？」

相当参っているのか、鬼気迫る表情で帥嗣に迫る青年。

どうやら本当に耐えがたいほどの空腹らしい。

気迫に押されて、帥嗣の方が折れた。

「わ、わかりました。少しなら奢りますから、落ち着いてください！あと、均時は捕まえなくてもいいです」

「さんきゅ！あ、店員、こっちこっち！オーダー！」

後半の方は聞かず、勝手に店員を呼ぶ青年。

この勢いだとどれだけ頼むかわかったものではない。

帥嗣は青年に見えるように財布の中身を確認する。五千円札が一枚と小銭が二、三百円程。

普通の人間が一食するには十分なお金がある。ただ、バイトをしない限り収入源がないのでなるべく無駄使いしたくはない。

「あつと……ブレンドとクラブハウスサンド一つずつ」

それで言葉を切る。

普通の一食分か、少し少ないくらいの量だ。

それであれだけの力を発揮できるのだから、相当燃費がいいらしい。

「……とスパゲッティとハンバーグセットとポテトサラダを一つずつ」

考えていただけらしい。

ここは学生向けというわけでもないの、割と良い値段が付いてしまう。

帥嗣は再度、青年に見えるように確認したが、青年は見向きもしない。

店員の方を見て何やら確認を取っていた。

「あ、ブレンドってお代わり自由だよな？」

「ええ、まあ……」

曖昧に返事をする店員。

先程とは違う店員だったが、今度は食欲と髪の色に尻込みしているらしい。

「お前もなんか頼めって」

「いえ、さつき朝食食べたばかりですし……」

「走ったんだろ？何か食わないとぶっ倒れるぞ？」

頼みたくても頼めない、とは本人を目の前には言えなかった。軽く暗算してみたところ、ぎりぎり財布の中身で足りるぐらいだ。偶然か、はたまた考えて注文したかどうかは定かではないが。

帥嗣の結構です、という視線を受けて店員がオーダーを復唱してから足早に店の奥へと消えていく。

「んで、お前は何で女を追いかけてたわけよ？」

「前置きも何もなしですか？」

「んな前置きが必要な話か？」

「いや、初対面ですし……」

「初対面の人間だからいらねえんだよ。今後一切あわねえし」
むしろそうだから、気を遣うべきだというのは価値観の違いだろう。

そう納得してから、喋りずらそうに話し出す。

「均時は、あの追いかけてた奴は、俺の元彼女なんです」

「そんでやり直そうって言いだして、逃げられたのか？だっせー！」

「違います！話を最後までちゃんと聞いてください！」

二人して大声をあげたせいで、数少ない店の客が全員こちらを向いた。

帥嗣はあわてて顔を伏せると、黙り込む。

対する青年はと言えば、周囲の視線など一切気にせず呵々大笑していた。

「分かりやすい性格の差だ。」

「ま、俺も人のこと言えないけどな」

「え？」

ひとしきり笑い終わると、そうぼつりと漏らす。

「どういうことですか？」

「いやな、昔彼女つつーか、まあ、そんな感じのに、殺されかけてな……。実際、腕一本織られた」

「相当壮絶な人生を送ってるんですね」

そんな経験を持つ人間に均時との話をして大丈夫だろうか、帥嗣に一抹の不安がよぎった。

主に身体的な意味で。

「んな、心配そうな顔すんなって。今じゃ骨折ったり折られたり何ってしねえつつーの。若気の至りだ、若気の。今でも十分若いけどな」

またキシシと、今度は含んだように笑う。

ほとんど一人で喋っているのに心底楽しそうだった。

結局、料理が運ばれてくるまでそんな和気藹々とした雰囲気のまま話し続けた。

オーダーをとった店員がおっかなびつくりながら持ってきたハンバーグセットを、行儀悪く頬張り始める。

「んがー、食べずれえっ！」

青年は左手だけでハンバーグを切ろうと努力して挫折していた。ナイフをフォークに持ち替えて、

一個丸々持ち上げるとそのままかぶりついた。

肉汁たっぷりのハンバーグがったようで、あふれ出た肉汁がダウんにかかり、青年は左手で慌ててダウンを拭きにかかる。もっていたハンバーグはと言えば、フォークの柄が真上に向くようにして鉄板に置かれていた。

「右手……使ったらどうですか？」

帥嗣はそう言わずにはいれなかった。

「あん？なんで？」

当然の指摘を不思議そうに受け止める青年。

やはり、かなりの世間知らずらしい。

「左手だけで食べずらいなら、右手を使えばいいじゃないですか、って言ったんです」

「なんか長くなってね？」

「あなたが不思議そうな顔をしたから、噛み砕いて言ったんですよ！」

再び上げられた大声に、店の客の視線がこちらに向く。

店員に注意されても仕方ないような行いだっただが、青年がいる所為か、誰かが注意に訪れるようなことはなかった。

それでも帥嗣は赤面しながら、他の客に向かって律儀に頭を下げてから着席する。

「なんで、右手使わないんですか？」

他の客の視線が自分から外れてから、今度は小声で帥嗣は青年に尋ねた。

「そりやお前、使わねえんじゃないかって使えねえんだっつーの」

「なんでですか？」

「なんでなんでって……さっきから疑問ばかりぶつけてくる奴だな。自分で少しは考えろよ」

「あなたが右手を使わない理由なんて、考えて分かるようなモノじゃないでしょう……」

ダウンジャケットを拭き終え、再び青年はハンバーグを先ほどよりは上手に、だが絶対的に食べずらそうに齧ってから、事もなげに右手を使わない理由を答えた。

「折れてんだよ、右手」

「はい？」

「だから折れてんの、右手が。たぶん単純骨折だからすぐくつつくだろうけどな」

「いや、聞こえなかったわけじゃないんですけど……。単純骨折でも一か月は掛かると思っんですけど」

「そうか？二週間もすれば大丈夫だろ」

もう一度、ハンバーグに齧り付く。今度は絶対的にも上手に食べた。

帥嗣は青年の話を半信半疑に聞きながら、青年の腕を覗き込んでみる。

確かに右手はだらんと垂れたままだったが、タウンジャケットの所為でよく分からないが、右手だけ膨らんでるようには見えない。おそらくギブスはつけていないだろう。

もしかしたら折ったのがずいぶん前の話で、すでにギブスが取れた後なのかもしれない。

「あの……折ったのって何時ですか？」

「んー、昨日だな」

ものすごい最近だった。

「病院は？」

「金ねえつつつたる？鳥頭か、お前」

確かに財布を落としたとは聞いたが、家には貯金くらいあるはずだ。

「痛くないんですか？」

「全然」

「本当ですか？」

「本当だっつーの」

「本当に折れてるんですか？」

「嘘に決まってるんだろ。んなわけねーだろ」

青年はハンバーグの最後の一口を口の中に放り、飲み込まぬうちに添えてある温野菜も食べる。

「お前心配しすぎだろ、ぜってー。ふつー、折れてたらこんなところで呑気に食事なんかしてねーよ」

青年は急にやる気なさげに、背もたれに腰掛ける。

空腹が少しだけ満たされ眠気でも出てきたのか、はたまた次の料理が来るまで暇なのか。

「なんか俺の話ばっかになってんだけど？」

「話つて言うよりただの嘘じゃないですか」

「うっせ。そろそろ、おまえの話、聞かせろよ」

「別にかまいませんけど……」

帥嗣は噂を耳にしたあたりからの事を掻い摘んで話す。

そう多くはなかったの、十分もかからなかった。

「ふうん。くっつたらね」

ひとしきり聞いてから、青年はそう言った。

「お前の話聞いているとき、バツカじゃねって思うぞ？たぶん誰でもな」

「ちよつときつ過ぎじゃないですか？言い方」

「ああん？」

「何でもないです」

仕切りなおす様に咳払いをして、一度店内を見回す。

「料理、こねえな」

「あなたが腹ペコキャラなのはメニュー頼んだ時点でわかりましたから、話進めてくださいよ」

「そうか？」

無駄にキャラを気にする人だった。

今度は面倒臭そうに左手で頭をかいてから、喋り始める。

「だってよお、話聞く限り、お前のモトカノのなんつったっけ

ヒトトキか？そいつはお前に未練タラタラだろ？」

「……はい？なんでですか？」

「いや、それこそ考えるまでもないこつたる」

盛大に一つ溜息をついてから、青年は俯きがちに滔々と語り始めた。

「まず、噂の件な」

青年は俯いて目を閉じ、如何にもやる気なさげな恰好で話を切り出した。

ちょうどそのタイミングでクラブハウスサンドとブレンドを店員が持ってくる。青年はそのことに全く気付いておらず、話の腰を折るのも悪いと思った帥嗣は直接受け取り、静かに自分の前にテーブルに置いた。

店員は帥嗣への配慮か、青年に話しかけられたくないだけなのかは定かではなかったが、静かに折り目正しく一礼すると店の奥へ戻っていった。

店員が去っていくのを見送ってから、テーブルに視線を落としてみる。

当然、さっき店員が持ってきたクラブハウスサンドが置いてある。新鮮な野菜と肉が香ばしい匂いのするパンに挟まれている。

それ相応の値段がするだけあって、相当美味しそうだ。

自分で食べないのがもったいない気がし、帥嗣は食べることにした。

見た目通りの美味しさを噛みしめながら帥嗣は青年の話に耳を傾ける。

「あんな噂、未練もないのに流すか？お前の話を聞く限り、頭はそこそ良好くて明るいんだろ？自暴自棄になったとしてそんな噂を流すにしても、そんな誰でも耳を疑うようなモン、本人が何度も否定してりやすぐ消えちまうし。性格から考えるとそもそも、別れた事への腹癒せならもつと物理的な手段に出てきそうだ」

「……まあ、そうですね」

急いで口の中にあつたクラブハウスサンドを飲み込んでから慌てて返事をする。

「でも、話した通り、あまり普通の精神状態とは言えませんでした。そういう行動に出てもおかしくないほどに。それに否定すれば消えますけど、否定続けないといけない期間が歴然とあります。ちゃんと、自暴自棄のダメージとしては食らうほどに」
実際、帥嗣の顔しか知らないような生徒からは真偽を尋ねられることはなく、ただ好奇の視線を向けられるだけだ。

十分に痛い。

十分すぎるほどに。

その痛さをごまかす様に、クラブハウスサンドを口に含む。

美味しいはずの味は……感じられなかった。

「だーかーらー、もうちょい考えろっつーの」

青年は鬱陶しそうに帥嗣を貶しながら続ける。

「今どきの高校生が分かれたぐらいで普通の精神状態じゃなくなるかよ。それこそそんな荒唐無稽な噂を流すほどに、な」

「それは……」

帥嗣は返す言葉がなく、言葉が続かない。

口の中のクラブハウスサンドはとっくに飲み込んでしまっていて、その所為にも出来ない帥嗣は、もう一度小さくクラブハウスサンドを口に放る。

そんな帥嗣の挙動を一切見ず、帥嗣に差なる追い打ちをかけるように言葉を止める事はない青年。

「そんなことするのは最初っから普通じゃなかった奴か、どっかで普通じゃなくなった奴だけだ。お前の彼女さんは後者だろ、ゼツテー。お前の話を聞く限りな」

「それでも……俺の知らないところで前者だったのかもしれない」
帥嗣は自分で言っていて、それはないと思えた。

均時は帥嗣の前では限りなく自然だったし、逆もそうだったと帥嗣は思っている。

秋色

「それが今のような事態を引き起こした一因でもあるのだが。
「まあ、そう考えるのはお前の自由だけだな」

青年は盛大にため息をついて顔をあげる。

「なっ、てめえ！人が頼んだもん勝手に食ってんじゃねえ！」

先ほどのやる気のなさはどこへ行ったのか、掴みかからんばかりの勢いで迫ってくる。

その迫力に圧倒され、思わず帥嗣は言い訳をした。

「もともと俺のお金なんですからちよつとくらいいいじゃないですか」

「何言ってるんだよ！頼んだ時点で俺のモンになってんに決まってるだろ！」

とんでもない理屈だった。

初対面の人間相手にそんなことが成り立っていたら、世の中他人にたかる人間ばかりになってしまう。

自分が世間知らずなのではないかと帥嗣に錯覚させるほど、青年の態度は横暴だった。

そんな青年に対し、火に油を注ぐようなことをする帥嗣。

「あの……いりますか？」

「いるに決まってるだろ！」

残り半分ほどしか残っていないクラブハウスサンドを左手でつかみ取り、青年は旨そうに咀嚼した。

火に油を注ぐような事をした結果、火に水を注いだ結果になった。自分で言っておきながら釈然としない帥嗣は、深く考えないことにして話を進めることにする。

「で、次は何ですか？」

「あん？次？」

「最初にまず、って言ったじゃないですか。だったら次があるんですよね？」

「お前記憶力いいな……。普通覚えてねえぞ？」

「それだけが取り柄ですから」

「ちげえねえ。女にも追いつけないんだから体力は期待できないんだろっな」

現場を目撃されていただけに、下手なことを言えば自分の傷をもっと深く抉りかねない。

この青年の場合、帥嗣よりずいぶん洞察力がいらいしいから、尚更だった。

「んで、次ってほどでもないが、もう一つ、未練タラタラってことを教えてやんよ」

「え？」

「腹癒せするような奴にわざわざ会いに行つて、視線合わせただけで逃げるかよ」

その通りだった。

あの均時の行動はいくらなんでも不可解すぎる。

姿を見せれば帥嗣が罪悪感を感じるから？

違う。学校にいた方がよっぽど遭遇率が高い。

昨日一日平然　とまではいかないが、しつかりと学校に来ていた。なら、シヨックで学校を休むとも考えにくい。

走りながら振り返りつつ、少し歪ながらも笑っていた。

なら、なぜ？

なぜ、だ……？

もしも仮に、だ。仮に均時が、ただ

自分の顔を遠くから見にきたただけだったとしたら？

「っ！？」

不意に、胸が熱くなった。

それを隠す様にうつむいて、目をきつく閉じる。

錯覚。

何でもない、幻想。

それなのに、こんなに胸を押さえてかきむしりたいのは、どうしてだ？

「んでもって、もうひとつ面白いことを教えてやんよ、百面相野郎」

帥嗣の目には入らないと分かっているながらも厭味つたらしい笑みを浮かべて、言葉を途切れさせない。

「なんで、噂の真犯人がモトカノってわかった時点で、否定するだけに留めなかつたんだよ」

確かに、犯人が分かつたところで釘を刺すだけなら意味はない。背びれ尾ひれがつきすぎた噂だ。発信源を立たなくとも、一月もせずに消滅するのは分かりきっている。

弥彦に頼めば、噂を消す手伝いくらいしてくれただ。それで十分とはいかないものの、八分くらいにはなつたはずだ。

「なんで、目線が合つただけのモトカノ追いかけたよ？」
そんなこと帥嗣自身、走っている時点で気づいていた。

自分の中にある、よく解らない衝動を。
自分の中にある、よく知らない感情を。

青年は忍び笑いをしながら、シニカルに帥嗣へと止めを刺す。

「なんで、お前そんなに辛そうな顔してんだよ」
「~~~~っ!？」

帥嗣は声にならない悲鳴を上げた。

「はん！何が、未練タラタラなのが分からない、だ。お前の方がよっぽど未練タラタラじゃねえか！馬鹿らしいにもほどがあんだよ！」
周りの客がこつちを見ているのは気にならなかった。

店員が注意しようとしているのに気付かなかった。
あまりに的を射た青年の指摘に、帥嗣は身動きも取れない。

今すぐ走り出したかった。逃げるためではなく、会いに行くために。

帥嗣の　好きな人に。

白前均時のもとへ。

なのに、一步もここから動けない。

「まあ、いまさら焦つたつてお前のモトカノが何処にいるかなんて知らねえだろうが。落ち着けての。最後に一つ質問が残ってるしな」

「質問ですか？」

「ああ、ここまで背中押してやったんだ。きつちり答えるよ？」

「……はい、わかりました」

「なんで、未練タラタラ同士のくせして、別れたんだよ、お前ら」
背中を押されたのは確かだが、適当にはぐらかされたり、嘘をつかれたりで釈然としない帥嗣だったが、素直に質問に答えることにした。

「このまま続けてたら、誰かを傷つけるって思いましたから」

「はあ？」

「あいつは 均時は独占欲が強いですから……。ちょっと話しただけでもすごく怒るんですよ。尋常じゃないくらい。それが俺に向くならいいんですけど……。いつも、相手向きなんです」

「んで、被害を防ぐために別れたのか？」

「いいえ……被害が起きたから、別れたんです」

苦々しく、帥嗣は続ける。

「あいつが他人を傷つけたから、別れました。幸いほんのかすり傷程度で済みましたが」

しかも、傷つけようとした本人ではなく、ちょうどその場に居合わせ止めに入った弥彦が。

その後、泣いて謝った均時を弥彦は快く、傷つけられそうになった女子生徒は渋々ながら許した。

均時自身も停学三日で済んだ。

その停学の三日間の間、俺は考えて、三日後に均時と別れた。

「はあ？他人を傷つけて、別れて彼女も傷つけたのか？」

「ええ、その通りです」

「そんなことして、誰が傷つかななんだよ。そんだけ重たく愛してた奴なら、別れたところで止めるとは思えねえし、そいつ自身、自殺しかねないだろ。振ったお前も傷ついたし、停学明けなんて変な噂が流れるかもしれない時期に守ってもらえるはずの彼氏から突き放されたそいつも傷ついた」

「ええ、その通りです」

「馬鹿だろ、お前」

「ええ……その、通りです」

「なら、馬鹿なお前にもう一回聞くが……」

青年は呆れたようにため息をひとつ吐き、顔を伏せて目を閉じてからもう一度、ゆっくりと尋ねる。

「お前、なんで彼女と別れたんだよ」

「それは……」

帥嗣は痛々しく眼をきつく瞑ってから、見開いた眼で決してこちらに視線に向けない青年をしつかりと見据える。

「俺が……俺があいつから、枷辻帥嗣が白前均時から、逃げたかったからです」

「ああ、それでいい！」

青年はニツカリと満面の笑みを浮かべる。

心地よくて爽快な、心癒される笑顔だ。

「なら、馬鹿なお前はどうするか分かってんだろ、あん？」

「ええ、もちろん」

帥嗣は立ち上がり、駆け出そうとする。

だがその脚はぴたりと止まって、青年の方を振り返る。

「焦ったら駄目、なんですよね」

「ああ」

「なら、ひとつだけ聞いてもいいですか？」

「ああ、なんでも聞いていいぜ？そういう年頃なんだろうからな」

「名前、教えてください」

「ああ、喜んで教えてやんよ」

青年は左手の中指を帥嗣に向かって立てて、堂々と名乗りを上げる。

「俺の名前は霧崎雀空。キリサキジャクウ 職業は殺人鬼だ」

「へえ、そうですか。将来子供にでもつけますから覚えておきます」

「うげえ、キモ！しかも後半は無視かよ」

そんな青年　霧崎雀空の言葉を聞かないで、帥嗣は歩いて出て行く。

胸を張って堂々と。

それから、帥嗣が翌日の二時に町の外れにある公園に呼び出す為、均時の家の前に立ったのはそれから五時間後、午後六時になってからのことだ。

ちなみに、霧崎雀空が帥嗣が勘定を払っていないことに気づいたのは、それよりそれより少し遅いくらいだった。

ライムライト

何も失われていない。
少々変わるだけだ。

翌日、一時の少し前。

この調子でいけば、公園には一時には着くことができるだろう。

一時。

均時のための時間。

昔、均時自身が冗談交じりに言っていた。

約束の時間までの一時間は均時のために使う最後の覚悟の時間だ。
ゆつくりと歩きながらも一歩一歩、覚悟をより確かにしていく均時。

今帥嗣が向かっているのは、町外れ、とはいっても団地の裏手にある山との境目あたりにある公園なので帥嗣の家からもそれほど離れていない。

そして、均時の家からも。

ただ、団地の裏とはいっても団地そのものに子供があまりおらず、遊具の老朽化も進んでいるということもあって、ほとんど子供は訪れることはない。

そんな、寂れた公園。

そんな、二人きりになるには絶好の場所。

その場所に今、到着。

帥嗣は腕時計を見て時間を確認する。

現在の時刻、ちょうど一時。

当然だった。帥嗣がそうなるように、歩みを調節したのだから。今から一時間、均時のことを帥嗣は待ち続ける。

あれだけ酷いことをしたのだ。均時は来ないかもしれない。

それが怖かった。

泣きたいぐらい怖かった。

耐えきれぬほど怖かった。

逃げたいぐらい怖かった。

怖くて。

怖くて怖くて怖くて。

本当に怖くてしかたなかった。

そうやって一回、怖くて逃げだした帥嗣が、もう一度怖さの中へ向かおうとしている。

でも、今は一回目とは違う。

一回目はただ、均時の強引さに流されただけ。それから怖くなっ
た。

その怖さは正直今も続いているが、それ以上に、怖さ以上に均時
が愛おしい。

怖いくらいに、愛おしい。

だから、泣かない。

だから、耐えきる。

だから、逃げない。

だから 誓う。

「はあ……落ち着け……」

深く息を吐いて、心臓を落ち着ける。

少しも動機はゆっくりになりはしなかったが、精神的にやらない
よりは幾分かましになった。

入り口でいつまでも立っているわけにもいかないので、公園の奥
へと帥嗣は入っていく。

元の色がわからなくなる程、錆びついた滑り台。

風につれるだけで軋むブランコ。

整備されておらず、硬くなってしまっている砂場。

朽ちかけて座っただけで折れてしまいそうなベンチ。

二人つきりになるには絶好の場所だったかもしれないが、告白にはあまり向かない場所だった。

いまさら遅いのだが、悔いる。

こういうことに対して疎い帥嗣でも、この状況はあまりに雰囲気
が良くない。

が、そんなことは今更どうしようもないことなので、早々に考え
を切り替えようとし、公園の真中から山を見上げる。

紅葉色付く山。そしてその上には最近建てられた、教会のように
白い大豪邸。

「あそこまでとは言わないけど、もう少しマシなところで……」

空しすぎるので、帥嗣は途中で言うのをやめた。

いつまでも見上げていたくなるような綺麗な建物ではあったが、
吹き下ろす乾燥した冷たい風が辛くなり、帥嗣は一度うつむいてか
ら振り返る。

「あ……」

帥嗣は振り返ったことを半分後悔、半分歓喜した。

現在の時間は午後一時十五分。帥嗣がここに来てから、まだ十五
分しか経ってない。

来ないんじゃないかというのは、とりあえず杞憂に終わった。

「やっほー」

数日前に見せた乱れようはなく。

昨日見せたような歪さもない。

二週間ほど前までは当たり前だった、白前均時がにっこりと笑っ
て公園の入り口に立っていた。

ただ服装はいつもは被らないような男物の黒いニット帽に、いつ
もは着ないような分厚いパーカーという色気の欠片もないスタイル。
帥嗣にはそれだけなのに全く別人に見えた。

でも、昨日のような確信のなさはなく、間違えようもなくそれは彼女だった。

心拍数がどんどんあがっているのが耳で聞こえる。今までにない感情の高ぶり方。

「……………やっほー」

覚悟はしていたもののあまりに動揺しすぎて、相手の言ったことをおおむ返しにすることしかできない帥嗣。

二人の関係を鑑みると、あまりに間抜けな光景だった。

落ち着け。

落ち着け。

落ち着け。

帥嗣はひたすらにそう頭の中で繰り返す。

「やっほー」

何の反応もない帥嗣に対し、もう一度均時が言う。

それでも帥嗣は何も言えなかった。

「……………」

「……………」

風の音と、ブランコがきしむ音だけが聞こえる静かな静寂。そんな現状をまず乱したのは、均時の方だった。

「ね、ねえ……………」

自分が何を言われるのか判別がつかないらしく、恐る恐る、笑顔を強張らせながら均時は尋ねる。

「あ、あのね、そ、その、えっと……………」

が、言葉が続かない。

恐怖心の方が上回っている。

帥嗣と同じように。

「あー、言えた立場じゃないけどまず落ち着け」

「う、うん……………」

今度は怖さを押し殺しながら、均時をなだめる。

あからさまに変な会話の空気。

二度目の静寂。

二人が落ち着くために、十分。

二人して十分間、その場に立ち尽くす。

「今日呼んだのはあれだよ、ね……？」

今度も先に口を開いたのは均時。

帥嗣は内心、まだ怖がっていた。

傷つけるだけ傷つけて、自分がやろうとしているのは せらに

酷いことを自分にはしているんじゃないかと。

都合良すぎることをしているんじゃないかと。

だが

「この前の事。ごめん、ほんとに、ごめ、んね」

目に一杯の涙を溜めて

「すごい迷惑、だったよね。あんな事、何の、意味も、ないのに、
ね」

泣かないように上を向き

「どうし、たんだろ。何でも無い、のに、馬鹿、みたい、だよおう

……」

もう一度笑顔無理矢理こちらに向ける彼女が

「うぐつ、ふえ、わあう……」

少しずつダムが決壊するようにホロホロと

「わあああ……」

ついに堰を切ったように泣き始め手も、決して帥嗣を責めること
なく

「スイー ごめん ね」

許しを請うように、涙でグシャグシャになった声で謝る姿に、目
の前が真っ暗になった。

……馬鹿か。

何やっているんだ。

何がしたいんだ。

やることが分かってるのに何迷ってんだよ。
それで　また自分勝手に均時傷つけてんだろっが……っ！

走った。

いや、飛んだ。

均時との間にあった五メートル以上の距離を一瞬で零にする。

もう何も関係ない。

もう何も見えない。

もう何も止められない。

もう何も離さない。

もう　均時を離さない。

体全体で、均時を抱きしめる。

「ふあっ！」

泣きぬれた顔が驚きへと変わり状況が理解できていないように、
声を上げた。

それでも、均時が理解するまで力強く、逃がさないように一回り
小さい均時の体を腕の中にしまいこむ。

きつと理解しても離さない。

きつと　離せない。

十分経っても。

二十分経っても。

一時間経っても。

「ふあー……スイだあー……」

でも、均時が自分の状況を理解して、帥嗣の気持ちを感じ取るに
は帥嗣の予想より早いものだった。

そして、落ち着くのも。

「ちよつと……痛いよ、スイ……」

「……ごめん。もうちよつと……このままにさせてくれないか」

「うん……いいよ」

もう、どちらが何をしたのかわからなくなっていた。

しっかりと、その場に均時がいることを確かめるように、体をくっつけ合う。

そんな帥嗣をなだめるように、優しく後ろに手を回す。

そして、また、十分。

それから、均時の耳元で小さく囁く。

「俺が言いたいののはな、そういうことじゃないんだよ。この前の」とじゃ……ない」

そう、俺はもっと都合のいいことだ。

俺にとって都合の良い良すぎることに。

「うん、わかった」

帥嗣と同じように、耳元で囁く。

「謝ったりするのは、全部を含めて俺だと思っ」

「ううん、そんなことないよ」

「許してもらおうなんて、虫が良すぎると思っ」

「ううん、全部許してあげるよ」

「お前に気を使ってもらってばかりだと思っ」

「ううん、それが私の自然だから」

「お前には全然釣り合わないと思っ」

「大丈夫、自信を持って」

「そんな俺でも、都合の言っでいいか？」

「うん、いいよ」

帥嗣の言うことを何一つ肯定せず、帥嗣そのものを肯定する均時。

どんなに傷つけられても、優しい均時。

だから、この優しさに甘えないように、ここに誓っ。

「謝らないで済むように、頑張るな」

「うん」

「許してもらえるように、頑張るな」

「うん」

「お前を守るように、頑張るな」

「うん」

「釣りあえるように、頑張るな」

「うん」

「だから」

「うん」

「言ってもいいか？」

「……うん」

涙ぐむ均時の声。

涙ぐむ帥嗣の声。

冬を告げる、冷たい風の中で、そつとつぶやく。

秋色

「大好きだよ」

秋色

ライムライト（後書き）

一応完結です。

めちやくちやばかして、省いて、改変しました。なので、小説をそのまま読み取ってしまうと、裏話をしたときにはたかれそうです。でも、十四話以内＋四万字以内という縛りに加え、『榎風といっしょ！』の第二部の伏線を色々含ませようとする、これが限界でした。作者の精神状態を含めて。

こういつ恋愛ものは初めてですから……。

因みに、この話の投稿が遅くなったのは、帥嗣が均時を呼び出すシーンを何度か書き直し、結局完成しなかったからです。

字数的にも入りませんでしたし。

それもこれも、霧崎雀空のとの無駄な絡みを書きすぎたせいです。書いてる方は面白かったです。

まあ、言い訳ですけど。

言い訳ついでにもう一つ。

サブタイトルと内容は全くと言っていいほど関係ありません。で挟んだ最初の方に書いてあった言葉に会わせただけです。

最終話がチャップリンの『ライムライト』、ヘッセの『知と愛』のもじり。

その格言でさえ、内容に沿っていたか定かじやないですし。

ごめんなさい。

とりあえず、謝りますけど。

遊びすぎました。

まあ、内容の謝罪話はこんなところです。

後書きそのものもこんなところです。

付け加えの報告としては『榎風といっしょ！』の第二部をまだ書き始めてもないので、四月半ばくらいの投稿を始めそうなおことです。

秋色

では、またの機会に会いましょう。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607d/>

秋色

2008年11月23日19時17分発行